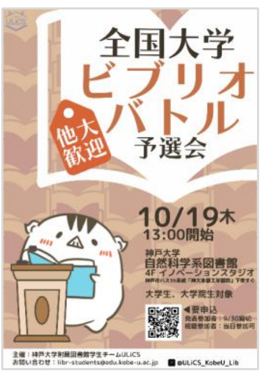
THE ULiCS TIMES

2023.10.vol.14

ビブリオバトル 主催決定

2023年10月19日13時から、全国大学ビブリオバトル関西Bブロック予選会を主催することが決定した。ULiCSがビブリオバトルの主催となるのはおよそ4年ぶり。会場となるのは自然科学系図書館4階のイノベーションスタジオだ。他大学も含む全大学生、大学院生に参加を募る。



▲(左)広報ポスター。学内に掲示している。(右)参加申し込みフォーム。視聴参加者を絶賛募集中。

ビブリオバトルは、本を紹介するゲームだ。発表参加者（バトラー）は5分間でおすすめの本の魅力を発表し、視聴参加者（観客）は投票で「チャンプ本」（最も読みたくなった本）を決定する。全国大学ビブリオバトルは、一年に一度、半年にわたり開催される大学生、大学院生のための大会だ。ブロック予選、ブロック決戦を勝ち進んだ者は、12月に東京都で開催される本戦に出場することができる。

ULiCSが今回主催するのは、ブロック予選会だ。新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響もあり、在籍する部員全員にとって初めての試みとなる。あいにく発表参加者の募集は終了してしまったが、視聴参加者はまだまだ募集中だ。興味のある方は是非とも、下記2次元コードから参加申し込みをお願いしたい。当日参加も可能なので、先の予定がわからない方も頭の片隅に置いておいていただければと思う。本好きの本好きによる本好きのための熱いバトル、乞うご期待を。

（国際人間科学部4年　佐藤）

2023年10月2日発行
神戸大学附属図書館学生チームULiCS

https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/
@ULiCS_KobeU_Lib
ULiCS 検索

知るカフェコラボ開催報告

2023年6月、知るカフェ神戸大学前店とのコラボ企画を実施した。他団体と共催したイベントはULiCS初の試みであった。

01 うりこがビラをばらまく！？

6月1日～6月13日、知るカフェのクーポン付チラシを総合・国際文化学図書館で配布した。知るカフェの広告物を大学構内で設置した例は今回が初めてのことであり、特に中間テストを控える1，2回生を中心に、「知るカフェ」の名前を知る良い機会を提供できたのではないかと感じている。また、チラシの配布開始に合わせ、双方のSNSではうりこが知るカフェからビラを持ってきたという設定の投稿を行った。

▲ 投稿例(@shirucafe06)

02 コーヒーと一緒に読みたい本

6月14日から、展示企画「コーヒーと一緒に読みたい本」と称し、カフェやコーヒーにまつわる5冊の本を総合・国際文化学図書館で紹介した。紹介図書については知るカフェ神戸大学前店公式インスタグラム(@shirucafe06) でも取り上げていただき、貸し出し状況は非常に好調であった。

▲ 展示用ポスター

03 コースターグッズ作成

▼ コースターデザイン

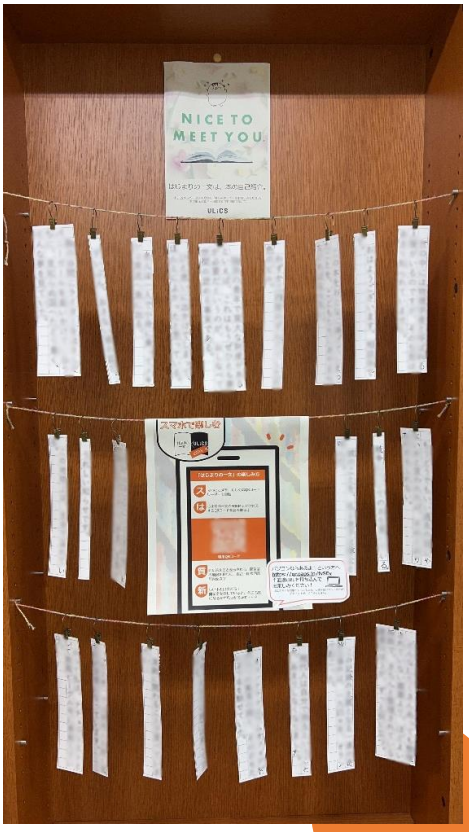
これまでクリアファイル、しおり、ブックカバーなどを展開してきた図書館のグッズに、新たに紙製コースターを追加した。デザインは水色と白を基調としたシンプルなもので、中央でひょっこり顔を出すうりこちゃんの可愛らしさが際立っている（イメージは右図参照）。7月末、コラボの一環として知るカフェでその一部を先行配布したが、わずか10日ほどですべて配り終えてしまった。コースターグッズの活用方法については、今後開催されるイベントでの配布等を含め、検討中である。

一見相性が良さそうに見える「カフェ」と「本」だが、知るカフェはキャリア支援、大学図書館は学問探究を志向する場であるため、コラボ企画のアイデアについて多くの試行錯誤があった。しかし、大学生活をより快適にしていきたいという共通理念を軸に、非常に良いコラボができたと感じている。今回の企画を開催するにあたり、ビラの設置やコースター作成にご協力いただいた図書館職員の皆様、また、コラボを共催してくださった知るカフェ神戸大学前店の皆様に感謝申し上げます。（国際人間科学部4年　中尾）

はじまりの一文、再び。

2023 Spring @総合・国際文化学図書館

4月中旬から5月中旬にかけ、総合・国際文化学図書館にて「**はじまりの一文2023**」という企画を行った。本の書き出しの一文目は、その本にとっての「はじめまして」の一言目と捉え、「春に新たに誰かと出会うように、新しい本と出会いの機会を作り出せないだろうか」というコンセプトのもと、昨年度実施した企画をアップデートし、2023年度版として打ち出した。それに伴い、開いた本の形を思わせるロゴにも**オレンジ色のしおり**でアレンジを加え、鮮やかではつらつとしたスタイルを目指した。同時にシステムを一部デジタル化に改良し、企画開催の過程での変更にも対応しやすいよう試みた。



▲総合・国際文化学図書館２階での、実際の展示エリアの様子。ロゴのオレンジと原稿用紙風のPOPに使われた緑が基調。

ロゴをアップデート！

▲2022年版のロゴ

▲2023年版のロゴ

総合・国際文化学図書館２階の展示棚には、書名を伏せて本の一文のみを掲載した**原稿用紙を模したPOP**を設置した。掲示した一文は「もうどうでもいい過去の話じゃないかと言われれば、そのとおりなのかもしれない。」「おはようございます、相談係です。」「独身の青年で莫大な財産があるといえば、これはもうぜひとも妻が必要だというのが、おしなべて世間の認める事実である。」「この本をおとなに捧げてしまったことを、こどもたちにあやまらなければならない。」など。

一文と地図を一体化させて配布していた昨年度版とは違い、Google Formで地図を取得できるようにしており、参加者には**QRコード**からヒントとなる図書館内の地図を獲得していただいた。それを頼りに書架へと本を探しに行くまでの一連が同企画の神髄である。企画実施前にはX（旧Twitter）で企画のカウントダウンを行うなど宣伝にも力を入れた。

そして「はじまりの一文」は名前にもある通り、本の「一文」の存在が欠かせない。これにはたくさんの読書歴と幅広い読書傾向を持つ**ULiCSの仲間たち**が大きく貢献してくれた。この場をお借りして、ULiCSメンバー、そして参加していただいた方々に企画者として感謝申し上げます。ありがとうございました。

（文学部４年　伊藤）

BOOK REVIEWS

ULiCSの新入部員が
おすすめ本を紹介！

江戸川乱歩『孤島の鬼』
角川ホラー文庫、2018年

『私はまだ三十にもならぬに、濃い髪の毛が、一本も残らず真白になっている。』

異様な見た目の主人公簑浦は、想像を絶するとある経験から一夜にして白髪に染まったのだと語り始める。

彼にはかつて初代という恋人がいたが、婚約直前に不可解な死を遂げた。簑浦は復讐心から犯人捜しを始めるが、捜査協力者として海水浴場に赴いた探偵深山木までもが簑浦の目の前で殺され、簑浦は恋人と探偵を殺した犯人を、海水浴場に居合わせた大学の先輩・諸戸であると睨む。諸戸はかねてより簑浦に恋慕の情を抱いていたにもかかわらず、突如初代への求婚を始めたりと謎の行動を繰り返しており、自身と結ばれない嫉妬心から今回の犯行に及んだのではと簑浦は踏んだのだ。

しかし諸戸に探りを入れつつ調査を進めるうちに、『お父っつあん』と呼ばれる人物が事件に絡んでいることを突き止める。その存在に心当たりがあると顔を青くする諸戸を前に、簑浦は二人でとある島へ赴くことを決意するのだった――。

本作は、日本のミステリー小説の礎として知られる江戸川乱歩の長編小説であり、憎しみと執着という一見相反する退廃的・耽美的要素をふんだんに盛り込んだものとなっている。

ここでのキーワードは「同性愛」ともう一つ、「〇〇」。ミステリーとして読むには大きなネタバレとなるので記載は控えるが、自分とは全く異なる人間(これが実はヒントだったりする)への愛憎、すなわち執着心が時として心に住まう鬼となりうるのだ、と恐ろしいくらいに実感させられる一作である。

（国際文化学研究科修士1年　榊原）

白田『府中三億円事件を計画・実行したのは私です』
ポプラ社、2018年

府中三億円事件―― 1968年12月10日朝、東京都府中市で金融機関の現金輸送車に積まれた約３億円の現金が白バイ隊員に扮した男に奪われた未解決の窃盗事件である。

この本は事件の容疑者を名乗る（真犯人か否か不明）白田によって、事件から50年後に執筆されたものである。ここでは、著者「白田」が事件の真犯人として扱うことにしよう。

作品には、犯行に至るまでの経緯や動機から如何にして完全犯罪を成し遂げたかの詳細な部分まで記されているのだが、私的な注目ポイントは犯行動機にある。

現金窃盗の動機といったら一般的には金銭目的だろう。しかし、白田の目的は全く別のところにあった。それは、当時の学生運動に感化された（白田は学生運動が激しい大学に在学していた）、「目の前の何かが変わって欲しい」「自分の野心をどこかにぶつけたい」「劇的に今の場所から自分を連れ去ってくれる、そんな強大な力が欲しい」というようなぼんやりとして実体の無いけれども……若者だけが持つ唯一無二の純白で大きな志と、ちょっとした痴情のもつれ（作品参照）から生じた激情の行き場であった。

現代を生きる若者にも共通する感情が引き起こした事件。読み終えた後には事件を他人事とも思えない自分が待っているはずだ。

（経営学部1年　村木）